

# 法律事務所 家事手伝い

川口 世文



6

東京コンデ  
アパルタメントズ  
TOKYO CONTE BRIS

## 第6話「夏越圭介も真夏のトレース」 2 池袋

翌日早くも筧川《おいかわ》丈一郎から連絡があった。夏越《なごし》圭介は日中の配達をアルバイトに任せて、池袋で筧川と待ち合わせた。

今日も東京は暑い。尋常じゃない暑さといっている。仮に自分のカミさんが、女友達と軽井沢の別荘に行くとウソをつけて、実は池袋界隈にいることが事実だったとしても、それはきっとこの暑さが原因に違いない。

筧川丈一郎は今日も和装だった。和服はそんなに涼しいものなのか、あるいは彼にはこの灼熱の暑さも通用しないのか、相変わらず汗をかいているようすがない。

〈東通り〉を抜けて〈ジュンク堂書店池袋本店〉の1階で圭介が合流すると、筧川はビックリガードを抜けて駅の反対側に向かい、そこから西池袋の住宅街に入っていった。

入り組んだ路地を通って大手出版社の建物近くにある喫茶店を示し、入口の食品サンプルがすっかり風化した古臭い店の窓側に席をとった。店内はガラガラだった。

飲み物をオーダーすると、彼はスマートフォンで撮影した画像を圭介に見せた。スーパーのレジ袋を提げた、Tシャツにジーパン姿の若い男が写っていた。

「誰ですか、この人は？」

画面に穴が空くほど見入っても何も手掛かりがつかめなかった圭介は、降参して筧川に目を向けた。

「情報が正しいとすれば、この人が夏越さんの奥さんといっしょに目撃された男性です。本当は奥さんを見かけた方にこれを確認してもらえるといいんですが、そこまで大ごとにするのが大変ですから、とりあえずこれを手掛かりに調査を進めようと思います」

「いったいどうやってわかったんですか？」

圭介は「ジャパン・ネコ探し・ネットワーク《JANET》」のロゴマークを名刺に刷り込んでいる、この非常勤講師の能力を過小評価していたようだと言った。

だが、和服姿の相手は女子学生にモテそうな優しい笑顔で笑っただけだった。その目がふと、薄汚れたスモークガラスの外に向けられる。

圭介の目がそれを追いかけると、宅配便のトラックと自動販売機の補充作業をしている最中の別のトラックが狭い路地ですれ違うところだった。

もう一度スマートフォンの写真を見せてもらおうと、まさにそれはこの近くで撮影されたことに気がついた。その証拠にレジ袋を提げた若い男の背後に写っているのと同じアパートが、喫茶店の向かい側に建っている。

圭介がびっくりした顔を向けると、笈川は満足そうにうなずいた。

「たぶん、もうすぐ出てくるころだと思います……」

そう言ってアパートの外廊下を顎で示した。

「あのアパートに住んでいるんですか？」

「この男性はね……どうやらそうみたいです」

「まさか——」

圭介の脳裏にイヤな妄想が湧きあがってきた。

「うちのカミさんもあそこにいっしょにいる——なんてことはないですよ？」

「それはないと思います」

笈川はそう否定してくれたのだが、あまりにそれがあっさりした答え方だったので、逆に納得できなかった。

「どうしてそういえるんですか？」

笈川の調査能力は素人目にもなかなかのものであるように思える。だが、この短期間にどこまで調査をして、何を根拠に否定しているのかまったく見当がつかない。

案の定、笈川も何と答えていいかわからず、刈り上げた側頭部を無邪気に搔いた。と、次の瞬間、その表情がキリツとなり、プロっぽい鋭い視線がアパートの階段に向けられた。

すぐに圭介にも何が起きたのかわかった。スマホの写真と同じ男が、似たような恰好で、ショルダーバッグを1つ肩にかけて2階から下りてくるところだった。

「行きましょう。あの男の後を追いかけてみましょう」

そう言って笈川がゆっくり立ち上がった。気を利かせて伝票を取り上げた圭介は、支払いをしているあいだも気が急いで仕方がなかった。

「大丈夫——彼がこれからいくところは大体見当がついています。慌てなくても大丈夫ですよ」

そういわれても急いで精算を済ませて、ふたたび強い日差しのなかに飛び出していった。時刻は3時を回ったところだ。圭介がやっている〈三毛猫〉という店の夜の部——ワインバー——は午後6時に開店するので5時には店に戻っていたい。しかし、今日はもうどうでもいい気がしていた。

×

ショルダーバッグを提げた若い男は、うだるような暑さのなかをやる気のない足取りで池袋駅の方角に歩いていく。自分が尾行されているなんて露ほども思っていないのだろう。そうでなければ、和服姿のひよろつとした男と、おどおどしたようすで尾行もどきをつづけている40男の奇妙な組み合わせに気づいてもよさそうだ。

やがて若い男は池袋警察署の前で通りを渡り、西池袋公園の方角に向かっていった。

そこまでのごく短い距離のあいだで笈川丈一郎が何人かの知り合いに向かって、手を上げて挨拶していること

に圭介は気がついた。

宅配便のドライバーや自販機用のドリンクを満載したトラックのドライバーなど、最初は彼の教え子なのかと思うような若い人に合図を送っていたが、それだけではなく、マンションの中年の管理人や、休憩中のタクシー運転手から、公園近くのホームレスまで、彼の知り合いは意外なところに、意外なほど多く存在していた。

これが「ジャパン・ネコ探し・ネットワーク」のネットワークなのか？ だとしたら、ずいぶんとまた地元に着した面子だなあ、と圭介は感心した。

細長い西池袋公園の北側に1台の白いロングバンがエンジンをかけたまま停まっていた。2人が追いかけていた若い男が近づいていくと、内側からスライドドアが開いた。男はそのなかを覗きこんで、ぺこっと頭を下げた。

「このままあの車の脇を抜けていきましょう」

袂《たもと》に手を入れて腕組みをした筧川が、さりげなくそう指示してきた。

圭介は彼の後につづいて、できるだけ自然な動きでロングバンの脇を通り過ぎようとしたが、どうしてもその動作はぎこちなくなってしまう。

バンのなかに誰が乗っているのか猛烈な好奇心が湧いてきて、とてもじゃないが「素通り」なんかできる状況ではなくなっていた。

ロングバンは後部の窓がパネルで塞がれている。車内は暗いものの、若い男の肩越しに1人の女性の姿が見えた。

圭介はグッと目を見開いたが、それは彼の妻ではなかった。もっと若い女性だ。うっかり目が合ってしまう、彼は頭に血が昇ってくるのを感じた。

女性が警戒したように若い男をなかに招き入れると、スライドドアが音を立ててしまった。最後の一瞬、女性の後部の車内にたくさんの洋服が吊りさがっているのが見えた。クリーニング屋のバンなのだろうかと側面にロゴを探したが、何も書かれていない真っ白な車だった。

「ガン見《み》してましたね、夏越さん」

相変わらずマイペースで歩いていく筧川が、チラッと圭介に目を向けた。非難しているようすはない。むしろ素人の行動を楽しんで見ている風だった。

木陰の多い公園の、バンから死角に入っている場所を選んで立ち止る。白い車はエンジンをかけたまま、10分ほどじっと停まっていた。

やがてまたスライドドアが開いて、今度は半袖の開襟シャツを着た男性がクリップボード片手に降りてきた。振り返って「いってらっしゃい」とばかりに頭を下げ、車が発進するのを待たずに公園から離れて歩きだした。

「さて、今度はあっちを追いかけましょうか？」

笈川が男の後ろ姿を示した。半袖から覗いた腕は筋肉が発達してよく日焼けしている。さっきの若い男とは違って、圭介1人で追いかける度胸が湧いてくる相手ではなかった。危険な匂いというほどではないが、何だか自分がトラブルに足を踏み込んでしまった気分になった。

「いったい誰なんですか？」

腰が引けているのを悟られないようにしながら、小声で訊ねてみた。

「さあ、誰でしょうねえ？」

和服の男は細い首を傾げた。しかし、彼はすでにその答えを知っているように思えた。

仕方なく圭介はふたたび笈川と肩を並べて、芸のない素人の尾行を再開した。半袖男もまるで警戒したようすはなかった。暑さでそれどころじゃないようだ。どうやらこの猛暑が圭介たちに味方してくれているらしい。

半袖男は立教通りを横切って、池袋西口から真っすぐ要町方向に伸びている大通りに出た。しばらく通り沿いを進んで、1階が大手旅行代理店になっているビルの脇の階段から2階に上がっていった。

圭介が見上げると窓に大きく〈F B エージェンシー〉と書いてある。こちらも旅行代理店のような名前だ。脇には〈F B スタジオ〉という文字も小さく見えた。

「やっぱりここだ……情報どおりだな」

笈川は満足そうに笑ったが、何も説明してくれようとしなかった。

「これからどうしますか？ 上にあがってみますか？」

気がつくとも圭介は敬語でそう話しかけていた。

すると、笈川はこう答えた。

「今日はここまでにしませんか。夏越さんにはそろそろお店の準備があるでしょう？」

「そうですね……笈川さんは？」

できればいっしょに店に戻って、`作戦会議、を開きたかった。これからどういう方針で、どれぐらいの時間をかけるつもりなのか、`ネコ探し、の本音が聞きたい。

だが、笈川の言葉は意外だった。

「ぼくは1人でいってみようと思っています。あそこに`潜入、してきます。それを夏越さんにも了解してもらおうと思ひまして……」

とあってまるで「ショッカー」のアジトでも見つけたような顔になった。

「1人で大丈夫なんですか？」

相変わらず不安のかけらも示さない笈川の態度が、却って圭介は心配になってきた。万が一彼に何かあっても自分には何もしてやれそうにない。

「大丈夫大丈夫——」

圭介の心を知ってか知らずか、笈川丈一郎は嬉しそうに笑った。

「では——行ってきます」

そういっていきなりビル脇の階段に向かっていった。

「え、もういっちゃん」

圭介は思わず声を上げたが、和服姿の奇妙な男の姿はすぐに見えなくなってしまった。

※この作品はフィクションです。

(2013年7月15日公開 ©Seven Kawaguchi 2013)